

## 入選

### 『扇の波』

本間一孝

「ママ、走ってもいい？」

「今日だけよ」

「うん」

次男の拓海が、「キャッホー」と甲高い声を上げながら縁側沿いの長い廊下をパタパタと楽しそうに往復する。庭ではプロのサッカー選手を目指している長男の海斗が、中学生にしては巧みなリフティングをしている。

(無理をして引っ越して良かった～)

私はふわりと笑うとまだ段ボール箱に入れっぱなしの洋服や食器、書籍などの整理をするために部屋へ戻りかけた。が、思い出したように足を止めて振り返った。

「海斗、絶対に壁にボールをぶつけないでね！」

私の少しばかり強い口調に、海斗は悠然とリフティングを続けながら言い返してきた。

「分かってるよ。ママのお気に入りのモルタルの壁だからね。心配しなくていいよ」

その言葉を聞いて、私は安心して部屋へ戻った。

2日前に引っ越してきた新居。一戸建ての中古物件を私たち好みにリノベーションした住居なのだが、外壁だけは私の意見を通させてもらったのだ。子供の頃に住んでいた家と同じようにするために――。

新宿から私鉄に乗って30分ほどの郊外都市。今でこそ駅前には高層ビルや商業施設が建ち並び、周囲には飲食店や商店、マンションなどがひしめき合い、ずいぶんと賑やかになった。だが、私が生まれ育った昭和40年代半ば頃は、駅前には肉屋、魚屋、八百屋などが並ぶ商店街しかなく、その周囲は住宅街が整然と広がる美しい街並みを形成していた。私の家はその一角にあった。平屋のそれほど大きな家ではなく、2つ違いの弟とは同じ部屋であったが、広い庭と土間が備わっていた。庭にはブランコがあり、近所の子供たちがたくさん遊びに来てはしゃぎ回っていた。土間にはベンチもあったから、やはり近所のおばさんたちが集まりわいわいとおしゃべりを楽しんでいた。わが家はご近所様の社交場のような存在で自慢の家だった。

しかし、そんな庭や土間よりも私が好きだったのが、家を取り囲む左官仕上げの扇模様のモルタル外壁だった。その曲線の美しさはもちろんのこと、下から上へと目をやると、

扇の波が壁沿いに進み、ついには青空へと突き抜けていくような錯覚を起こす。私はそんな錯覚が心地よく、いくどもなく眺めては楽しんだものであった。

そんな様相が一変したのは、私が高校生の頃だった。周りの家々が建て直しをしたり、不動産屋に買収されてマンションやアパートへと建て替えられる中、私の家も右へ倣えのごとくマンションへと形を変えた。敷地だけは広がったので、両親がマンション経営に乗り出したのだ。

私たち家族の住居は6階建ての最上階の角部屋となった。4LDKのゆったりとした間取りで、初めて自分だけの部屋を持つことができた。エアコンも設置してもらい一年中快適に過ごせ、エレベーターがあるので階段の上り下りも関係ない。私たち家族4人はそれぞれの空間で自由気儘な生活を満喫するようになった。気が付くと食事はバラバラにとるようになり、リビングで一緒に会話をしたりテレビを見たりすることも減っていた。何より、それまで集まっていた近所の人たちの姿が日常から消えていたことに愕然とし、私の心の中にはもの悲しさが漂った。といっても、「住めば都」ということわざがあるように、月日が経過するごとに私たちは新たな日常に慣れていった。

その後、私は20年近くも同じ部屋に住み続けていた。

(私はこの部屋で一生を過ごし死んでいくのだろうか……)

そんなことを些か感傷的に考えるようになっていたある日。私は慣れ親しんだ部屋から退出することになった。30代半ばにしてようやく結婚した時だった。

遅まきながら新婚生活を送ることになった私は、一戸建て住宅ではなくマンションでの生活を希望した。利便性などが理由ではなく、ただマンションでの生活が長かったからだ。幸い、主人もマンションでの一人暮らしが長かったので、お互いの利害は一致した。

10階建て賃貸マンションの8階が新居となった。2人とも働いていたので、お互いの職場が近くて、駅から徒歩で10分のマンションを借りた。3LDKの間取りは夫婦2人には広すぎたが、長男の海斗を授かってからはしっくりといくようになった。そして、40歳をいくつか過ぎた頃、すっかりと諦めていた2人目の赤ちゃんを懐妊した。その頃からである。3歳になった海斗が室内でミニサッカーボールを蹴っては追いかけるようになったのは――。

当然の結果、隣の住人と下の住人の方から苦情がきていると管理会社から連絡が入っ

た。私は遊びたい盛りの海斗を叱ったり、無理やり椅子に座らせたりした。だけれども、ちょっと目を離すと、すでにボールを蹴っている。近くの公園にでも行けばよかったのだが、つわりがひどくなっていて外出する気分にはなれず、いつしか私は育児ノイローゼになりかけていた。さすがに、このままではダメだ。というわけで主人に相談したところ、こともなげに言われた。

「だったら、引っ越そうよ」

「本当に？」

「ああ。もう一人子供が生まれて来るから考えてはいたんだ」

少々太りじしで温厚な性格の主人の呑気な顔が頼もしく見えた。

次の新居は中古マンションの1階の角部屋だった。専用庭もあり、海斗は好きなだけボール遊びに興じることができるようになった。そして、無事に拓海を出産して、私は専業主婦として安寧の日々を過ごしていた。けれど、上に住んでいた高齢の夫婦の代わりに高校生と思われる女の子がいる家族が住み始めてから事態が変わった。昼夜問わずに時間さえあれば庭でリフティングをしている海斗。部屋で元気にはしゃぎ回る拓海。受験勉強をする2階の女の子には邪魔な雑音としか聞こえなかったのだろう。

「うるさい。静かにしろ！」

夜9時ごろ、海斗がリフティングをしていると、女の子に罵声を浴びせられた。主人にその話をしたところ、

「そのうち、拓海も怒られることになるんだろうな。また、引っ越すか」

「ここのローンが残っているのに大丈夫？」

「君のへそくりを頭金にすれば問題ないだろう」

主人にはへそくりのことがばれていた。

そのような経緯を経て、一戸建ての中古物件に引っ越したのである。

台所、風呂場、トイレ、リビング、子供部屋等々のリノベーションは安くはなかったが、元の物件がお手頃価格だったので、トータルで比べると新築物件を買うよりはかなりの低価格に抑えられた。何より、懐かしのモルタル外壁を再び手に入れられたのは嬉しい限りだ。

晴れた日。私は子供の頃のように、扇の波を下から上へと眺める。波はこれからの自由を追い求めるように青い海原へと旅立っていく。